琉球大学学術リポジトリ

《音楽科》音楽表現の美しさや豊かさを感じ取り創意工夫する力をはぐくむ授業づくり：音とリズムを組み合わせた創作活動を通して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部附属中学校
	公開日: 2020-06-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金城, 園美, 村田, 昌己
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45990

《音楽科》

音楽表現の美しさや豊かさを感じ取り創意工夫する力をはぐくむ授業づくり

― 音とリズムを組み合わせた創作活動を通して ―

金城園美*　村田昌己**
*琉球大学教育学部附属中学校　**琉球大学教育学部

Ⅰ　主題設定の理由

様々な文化や、多様な価値観よって、より一層の変化の激しい社会が到来する中、学校教育では、「21世紀型能力」の育成が求められている。このような時代を生き抜くために学校教育の中で、どのようなアプローチをすると生涯に渡って一人の人間としてより良く生きていくことに繋がるのかを音楽科の本質をしっかりと捉えつつ探究していきたいと考える。ここでいう音楽科の特質とは、『中学校学習指導要領解説音楽編』にも謳われているように「豊かな情操を養う」(1)ことである。「豊かな情操を養う」ことは、一人ひとりの豊かな心を育てる重要な意味を持ち、情操は、美しいものや優れたものに接して感動する情感豊かな心とも言われている。その情感豊かな心を育てるためにも、音楽科が担う役割の根本的な質を高めていきたい。音楽によって感情を表現したり、表現された感情を感じ取ったりする中で感性が豊かになると考える。また、感動や共感を伴った音楽経験を通して、自己の存在を意識し、他者を理解することにも繋がるのではないだろうか。

さらに芸術系教科・科目においては、思考力・判断力・表現力を高めるため、リテラシー能力を引き上げるための活動を行うほか、言語以外の方法（音や形、色など）を用いた言語活動や、音や形、色などにより表現されたことを捉えて言語活動並びに表現活動を行うことが大切である。また、捉えたことを、喩えたり、見立てたり、置き換えたりすることは、音楽科教育の「表現」や「鑑賞」を深めていく際に重要な活動でもある。そのため、「アクティブ・ラーニング」の「深い学び」や、「対話的な学習」、「主体的な学び」の視点からの学習・指導の工夫や改善・充実を図る上でも、音楽科に関しても現行の学習指導要領において重視されてきた言語活動や、さらに深まりのある表現活動を通して、教科の特質に応じた充実を図ることも求められている。このような音楽科の特質と期待をふまえた上で、生徒自らが思考・判断・表現していくための学習活動はどのようにあるべきか探っていきたい。

生徒達は、自分の感じたことを言葉で表現し文章にすることはできるが、それを基に音楽科の授業の表現活動の中で思いや意図を持って表現するという力を身につけるとさらに充実した表現活動ができるのではないかと考える。

Ⅱ　研究の目的

本研究では、「表現」（創作活動）に関するアクティブ・ラーニングの在り方を通して、創意工夫する力をはぐくむことを目的とする。

Ⅲ　目指す生徒像

生活の中の音楽経験と、表現（創作活動）を繋げることによって、思いや意図を持った音楽表現をす

ることで豊かな情操をはぐくむことができるであろう。

Ⅳ　研究内容

現行の学習指導要領音楽科では、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図を持って表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活との関わりに関心を持って、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育む等に重点を置いて、その充実を図ってきたところである。一方で、感性を働かせ、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや価値等を考えたりしていくこと、我が国や郷土の伝統音楽に親しみ、よさを一層味わえるようにしていくこと、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについては、更なる充実が求められている。さらに表現領域の歌唱以外の分野（創作）の充実した取組みの中で、音楽科の特質に応じた深い学びを展開し充実していくことが求められている。[(2)]　また、新学習指導要領改訂の目指す方向性として、グローバル化や情報化が著しく変化していく現代において、次世代を生き抜いていくために、「何ができるようになるか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶか」という資質・能力を明確にしながら更なる充実を図るために音楽科ではどのような資質や能力を育むために、音楽科で目指すことを具現化し研究を深めていきたい。

1　音楽科において育成を目指す資質・能力

新学習指導要領改訂の目指す方向性を受け、音楽科の学習過程の中で最も重要だと捉えていることは、「思いや意図を音楽で表現する」ということである。その流れは、音楽を形づくっている要素を知覚し、協調学習を通して、互いに試行錯誤したり、創意工夫したりすることで表現することができるのではないかと考える。

知識や技能面においては、曲想と音楽の構造や背景との関わり及び音楽の多様性などの音楽文化について理解することや、音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解することや、自分なりに音楽表現を創意工夫したり、思いや意図を音楽で表現したりするための技能を身につけさせたい。

また、音楽の中での思考力・判断力・表現力については、①音楽に対する感性を働かせ、音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら、知識や技能を得たり活用したりして、音楽表現を創意工夫し、どのように表すかについて思いや意図を生み出すことや、②知識を得たり活用したりして、音楽を自分なりに解釈したり、音楽と人々の暮らしなどとの関連から音楽を捉えたり、自分にとっての価値を考えたり、よさや美しさを味わい、音楽の意味や価値を生み出すことの力を育み、音楽を通して学びに向かう力・人間性を培うために、音や音楽のよさや美しさなどの質的な世界を価値あるものとして感じ取る感性・協働して音楽活動する喜びの自覚・音楽の学習に主体的に取り組む態度・音楽を愛好する心情・音環境への関心・音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度・我が国の音楽文化への愛着や、諸外国の様々な音楽に関わる態度・美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心としての情操などを挙げていき、資質・能力をはぐくむための学習過程としては、音楽科におけるアクティブ・ラーニング（今回は、比較聴取やグループ活動）を取り入れ、アクティブ・ラーニングの取組みの中で、生徒一人ひとりの音楽に対する豊かさや美しさを感じる心、さらにそこから発展して創意工夫する力に結びつくことに焦点化していき、そのために授業では常に「音」を中核において学習を展開していく。

その取組みの中で音楽を形づくっている各要素「旋律」「リズム」「ハーモニー」「音色」「強弱」「形式」「構成」「テクスチュア」を意識させながら、より創造的に表現の工夫を考えていけるような流れを設定し、最終的には、汎用的能力の育成（解決力・創造性・協調性）の習得をねらいとしていきたい。

2　音楽科授業ではぐくむ表現活動

(1) 音楽科の表現領域ではぐくむ力

『中学校学習指導要領解説音楽編』では、音楽科では具体的にどのような資質・能力をはぐくむのか。

まず、音楽科では音楽を形づくっている要素を知覚（音楽の要素や構造を、感覚器官を通してとらえること）・感受（音楽の要素や構造によってもたらされる音楽の雰囲気を感じ取ること）できるようになることが、生徒が生涯のうちに出会う多様な音楽を理解するための重要な窓口となっていく、知覚・感受する基礎的な力を表現、鑑賞の全ての領域で展開していくことが生涯にわたって楽しく音楽活動ができるための基になる能力であると謳われている[1]。

そして、生徒自身が、音楽を形づくっている要素を知覚・感受し、その音楽を価値づけ理解していく（批評）プロセスの中で思考は働く。批評というのは、「音楽のよさや美しさなどについて、言葉で表現し他者に伝える」行為のことである。

(2) 音楽的な見方・考え方

「音楽的な見方・考え方」とは、文部科学省教育課程部会芸術ワーキンググループ配付資料によると、「音楽に対する感性を働かせて、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で音楽を捉え、音楽的特徴と、音楽によって喚起されるイメージや感情、生活や社会、文化等とのかかわりについて考えること（中学校音楽科）」と説明されている。

つまり、音楽を形づくっている各要素（旋律・速度・リズム・音色・強弱・形式・構成・テクスチュア）とその働きの視点を持って、活動を充実させる指導の中の表現領域（主に歌唱としてとらえた場合）では、自己の表現意図を言葉で表すことや、音によるコミュニケーションの充実を図る場面では、音楽に対するイメージや思い、意図などを相互に位置づけ、仲間とともに創意工夫して音楽表現する喜びを味わうような指導が望ましい。音楽科の授業においては、学習指導要領に記されている「知覚」と「感受」にあたる。これは、自分が聴き取ったことや、感じ取ったことを「言葉」に置き換えることで、その経験や記憶はより深く刻まれ、意見を相互に伝え合う活動は、視野も広がり、思考力・判断力・表現力を鍛えることにもなる。授業の中でそのような経験ができる場面、生徒自らが学びを得られるような場面の設定が大切である。

(3) 創作の指導内容の焦点化と明確化

新学習指導要領では、創作の指導内容について、①言葉や音階を手がかりに「旋律をつくる」②反復・変化・対照といった「構成の工夫」③音を出しながら音のつながりを確認する「即興性」というような「音」を「音楽」へと構成していく体験を重視すると示している。

3　生徒の姿からめざすもの

本校音楽科では、「歌唱」「器楽」「創作」「鑑賞」の各活動分野の中で音楽のもつよさを感じながら、意欲的にかつ能動的に活動できるようになること、そして、音楽文化の多様性を理解できるようになること、音楽を通して豊かな感性が育つことをめざしている。

本校の生徒は、自分の感じたことを言葉で表現し、文章に表現することはできるが、それを基に音楽科の授業の中での実際の歌声や、歌詞のフレーズを意識して表現していく活動に対し、思いや意図を持って表現する力が若干弱いのではないかと感じる場面がある。また、そこには、姿勢や呼吸法・発声法という技術的な部分も原因となっていることも否めない。

そこで、根本的な部分も含め、思いや意図を持ち、創意工夫して歌うことができるような学習活動をめざしたいと考える。

4　音楽科「表現」領域の授業デザイン

(1) 音楽科「表現」領域における創作活動

本テーマにも掲げてあるように、美しさや豊かさを感じ取り創意工夫する力をはぐくむ授業づくりのために、創作活動におけるアクティブ・ラーニングを通して、音楽科「表現」領域の学びを深めていける授業を展開しなければならないと考える。そこで今回は、創作活動に入る前に「リズム」のパーツの確認を行い、それぞれのリズムの特徴やそのリズムを重ねていくことで、どのようなリズムフレーズが生まれるのか体験活動を行った。その際、リズムモチーフを活用し、何拍子系という部分まで活動を進めた。その活動を毎時の導入に用いて授業へのモチベーションを高めた。

(2) 創意工夫するための手立て

①「学びの地図」（表１）を毎時間提示し、流れを認識させ活動に入る。

②既存のCMの中で３つのパターンのCMを選択し、その違いを比較鑑賞させ、CM音楽についての興味・関心を高めイメージを膨らませる活動。（３つのパターン→音楽だけのもの・音楽に言葉がのっているもの・音楽と言葉と動きがあるもの）

③旋律の流れや言葉の抑揚を線画や絵コンテで表現する活動。

表１　学びの地図

1.イメージに合う旋律になるためには？（グループ）	第１時
2.言葉とリズムに合う音を繋げる。（グループ）	第２時
3.音楽を形づくっている要素（リズム・旋律）を確認しよう。（個人・グループ）	第３時
4.互いのつくった旋律を伝え聴き合おう。（グループ）	第４時
5.まとめ（個人）ワークシート・発表	第５時

(3) グループ活動のポイント

思考が深まり、表現が高まる充実したグループ活動を展開するために以下のポイントをまとめる。

①導入時における課題把握

音楽表現の創意工夫をねらいとしてグループ活動を取り入れるため、導入時の課題を明確にする。生徒自ら「どのようにしたら？」「どんなイメージ？」など、「CMって何のためにある？」「インパクトのあるCMってどんなもの？」「なぜそう思うの？」といったグループ活動に入る前に個人で考えさせる場面を設定し、その課題に対して自分なりの考えを明確にした上でグループ活動に入る。そこから実際に対話する場面で根拠を持って伝え合う活動ができるようにする。

②表現を工夫する部分を焦点化

限られた時間の中で、また、この教材で何を身につけさせたいのかを焦点化するが。今回は、「音」と「リズム」に焦点化した。

③視覚的資料の工夫

リズムパターンカード（掲示用・グループ用）・ワークシート等より活発に主体的に対話をできるように掲示物の準備と、流れを確認しながらまとめをしやすいワークシートの工夫。

④学習ツールを用いた活動の支援

話し合い活動において、互換性のある対話が行われるよう、一人ひとりが音楽的な知識の習得や、音楽を感じ取る力をはぐくむ環境をサポートできるように設定していく。また、「音」や「リズム」などを身近に確認できるツールとして、「ミニキーボード」を各グループに１台配置した。

V　実践事例

１　音楽科におけるアクティブ・ラーニング実践の概要

(1) 領域：表現

(2) 題材名：「簡単な旋律づくり」

(3) 対象：１学年

(4) 教材：「CMソングをつくろう」

(5) 学習目標

言葉のイメージに合うよう音やリズムを組み合わせながら簡単な旋律づくりをする。

(6) 指導内容

①音楽を形づくっている要素について

②リズムづくり・旋律づくり

③言葉とリズム・音の組み合わせ

④比較鑑賞

(7) 学習活動

今回の実践の流れを以下にまとめる。５時間計画で実践した。限られた時間の流れの中で、いかに一時間一時間ごとの問いを掴み展開していくことができるか（表２）。また、学習の展開の流れに沿った思考を具体的にどのように捉えさせていくかを思考の具体化としてまとめた（表３）。その流れを具体的に示すことによって各時間の授業の核をしっかりと認識し実戦することに繋がる。

表２　単元計画（全５時間）

第１時	本題材における「学びの地図」について知る。 「CMの役割について理解する。」 ・CMの特徴について考える。 ・既存のCMを比較鑑賞する。 ・テーマ及びモチーフを決める。 ・どこをアピールするのか売り込みポイントを核としたイメージを考える。
	「キャッチコピーについて考える」

第２時	・グループでキャッチコピーを１つにまとめ、それに合うリズムを組合わせ、旋律を生み出す。 （主体的な学び）
第３時 （本時）	**「言葉とリズム・音を組み合わせた簡単な旋律をつくる。」** ・グループで試行錯誤しながら、リズム打ちや歌、楽器などを用いて表現したいイメージに合うよう練り合う。 （対話的な学び）
第４時	**「イメージに合う旋律をつくる」** ・キャッチコピーと旋律が合っているか確認し、イメージに合った旋律なのか、CM ソングとしてインパクトのある表現になのかについて考えさせる。 （対話的な学び）
第５時	**「自分たちの CM ソングを発表し聴き合う。」** ・比較鑑賞をする。 互いの音楽表現から、音楽に対する価値意識を広げていく。 （他者交流） （グループ発表・鑑賞・深い学び）

表３　学習の展開の流れとそれに伴う思考の具体化

	学習展開の流れ	思考の具体化
1	目標の設定	焦点化する
2	要素の焦点化	旋律・リズムに着目する。
3	思いや意図の共有化 ＊聴き合う時間の設定 ＊対話する時間の設定	視覚化する・ 共有する 他者との関わり （ペア学習・グループでの話し合いなど）
4	創作活動	イメージを膨らませる。 音と音をつなげる 音とリズムを繋げる （創造性）
5	表現を高める	練り合う。 （創意工夫）
6	創り上げる	発表・披露する。

２　各学習活動の内容

(1) 学習指導要領との関連

共通事項は「リズム」「旋律」である。

A表現（３）創作ア「言葉や音階などの特徴を感じ取り表現を通して工夫して簡単な旋律をつくること」を掲げ授業を展開していった。

(2) 内容項目

本題材における学びの地図について認識し、創作活動の流れを理解させる、毎時ごとの導入で確認を行い、授業を進めていった。

第１時　【イメージの創造】【比較鑑賞】

①CM の役割について理解する。

②CM の特徴について考える。

（CM は何のためにあるのか？）

（インパクトのある CM はどのようなものか？）

③既存の CM の比較鑑賞。

④どんな CM ソングを創ってみたいか。

⑤テーマを考える。

⑥テーマをもとにキャッチコピーを考える。

図１　イメージの創造（対話場面）

第２時　【主体的な学び】

①前時に個人で考えたキャッチコピーを持ち寄りグループでキャッチコピー１つに決定する。

②その言葉に合うリズムを考える。その際、創作の手順を意識させながら言葉とリズムを繋げさせる。

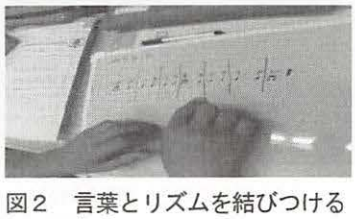


図２　言葉とリズムを結びつける

音楽

第３時（本時）　【創意工夫】【対話的な学び】

①グループで試行錯誤しながら、リズム打ちや、声に出して歌ったり、楽器を用いて「音」と対話したりしながら作っていく。

②リズムと音を視覚化してグループで意見交流がスムーズに流れるようにしていく。

③自分たちのイメージに合う旋律にするためにどうすれば良いか話し合う。

図３　リズムと音と言葉の組み合わせ

図４　リズムと音と言葉の組み合わせ（対話）

第４時　【創意工夫】【対話的な学び】

①前時までに創り上げた作品をさらに練り合いより自分たちのイメージに合った旋律になっていか考えさせる。

②イメージと音楽の諸要素との関わりもあるのか確認させる。

図４　練り合いの場面（対話）

図５　練り合いの場面（音と対話）

第５時　【比較鑑賞】

①それぞれの作品を発表し、互いの音楽表現から良さや、工夫点を見つけ出し、それについて根拠をもって説明する。

図６　発表場面

(3) 考察

①生徒の変容

生徒は、第１時の比較鑑賞の際 CM に対して「楽しそう」「楽しい CM づくり」や、「ついつい口ずさむ CM」といった比較的簡単なイメージを持っていた。しかし、いざ口ずさんだ言葉と音やリズムを結びつけようとした時に、なかなか合わせられない、難しい、どうすればもっとイメージに近づくのか、といった悩む場面にどのグループも直面していた。だが段階を踏まえて、特に第３時で、隣のグループの作品（途中段階）を聴き合う場面で、聴く視点を「言葉の抑揚」「音高」「リズム」に絞っていくと、その後のグループ活動で自分たちの作品についてもその視点を考えて練り合う様子に変化し、難しいという様子から、工夫しようという様子に対話の内容も変化していった。ここでは、比較鑑賞というお互いで共有する場が、その後の深める場に良い影響を与えていたのだと考える。その中で授業者が一番変化を感じたグループでは、生み出した旋律を反復させ、そこに和音をのせ、最後は楽譜にしていきたいと自分たちで意識の変化を感想にしていた。

②学習ツールとしてのミニキーボードの活用

今回は各グループに１台ミニキーボードを設置し、話し合いの場面で、特に音を探っていく場面での活用であったが、生徒は、同じフレーズを何度も繰り返し弾きながらグループのメンバーで練り合っている様子が見られた。その場面こそ「音との対話」であった。その一方で、ミニキーボードでは今の音やフレーズを客観的に確認することが難しい、キーボードを弾ける生徒が必ずしもグループにいるとは限

らない、といった面も感じられた。現在創作のためのソフトが既存であるので、PC 上での創作活動の方がもしかすると有意義になるのかもしれない。

③CM のテーマ設定

各グループ自分たちの興味・関心の深いところをテーマに設定し創作活動を展開したが、テーマを１つに絞り、その中で生み出される旋律を比較鑑賞することで、生徒はより深まりのある学びとなったのではないかと考える。発達段階に応じて系統だてた創作活動の計画を吟味する必要性を感じた。

④評価について

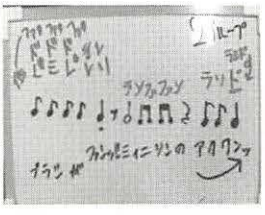
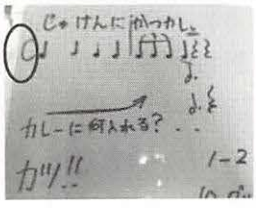
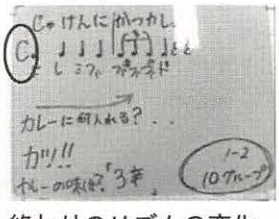
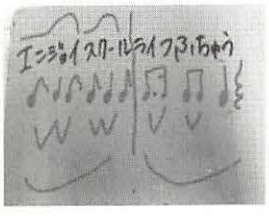
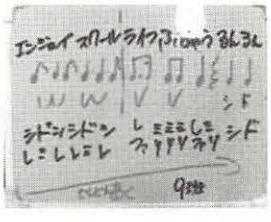
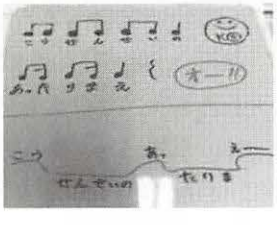
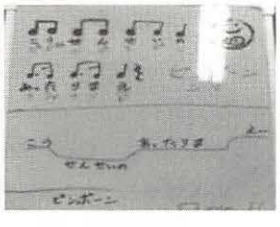
「イメージに合うよう、リズムや旋律の抑揚を生かし、どのように変化させまとまりのある旋律をつくっていくか根拠をもとに旋律をつくっている」という音楽表現の創意工夫の項目の中で期待する解として掲げたが、「根拠」という部分に関しては、グループ差がいなめなかった。やはりそこで、何のために創作活動を行うのか、どうして、この「音」を用いるのかといった部分を導入段階でしっかりと認識させる必要性がある。評価の場面は、完成された作品はもとより、授業時の対話の場面・ワークシートの記述・音とかかわる場面などに重点を絞って評価に結びつけた。

Ⅵ　実践の成果と課題

１　成果

今年度は「表現」領域の「創作活動」において、「創意工夫する力をはぐくむ」ための音楽表現を実践してきた。生徒は互いに色々なアイディアを出し合い、さらには、自分たちの思いや意図をそこに表現するため試行錯誤を繰り返しながら１つの作品として完成させてきたのだが、始めは、「ことばとリズムのみ」というものから、考えを深めていくうちに、「ことばとリズム・音＋音の高低（語尾）」まで変化してきた。（グループA）そして、始めから拍子を決めて、その中で音とリズムを変化させ最後のフレーズにインパクトをもってきたグループもあった（グループB）。さらに音の高低も意識し、既存の曲をモチーフに擬音語も取り入れ完成した作品（グループC）。また、言葉の抑揚の変化に着目し、そこを何度も何度もお互いの意見を出し合い完成した作品もあった（グループD）。

このことから、生徒は、ことば（キャッチコピー）からくるイメージをどんどん膨らませながら、より自分たちのイメージに合ったものを探しながら創りあげてきたと感じる。また、イメージがより表現したい形として表現したいという思いや意図をもち、音を重ね合わせハーモニーにして作品にしたグループもった。そこは成果の一つとして深まりの部分であったといえる。さらに学級によっては、お互いの作品を動画におさめ本物の CM のように発表したいという声もあがり動画撮影まで繰り出し作品を完成させた。

	工夫を重ね変容した作品	
グループA	ことばとリズム	 ことばと音、音＋高低
グループB	 はじめから４拍子を決定	 終わりのリズムの変化
グループC	  音の高低を意識し、擬音語も用いた	
グループD	  言葉の抑揚の変化	

2　実践から見えてきた課題

(1) 創作活動の難しさ

文部科学省から見た現状と課題の中に、表現領域の中で、歌唱活動に指導が偏る傾向があり、特に創作と鑑賞の充実が求められている。その課題もふまえて今回創作活動を実践してみたが、現場においては限られた時間の中でどのようにカリキュラムを組むのかという部分も課題の１つである。また、教師自身が作曲する過程をしっかりと体験することが必要である。なぜなら、音楽的知識をあまり持っていない生徒へどのような手立てをすると創作活動がスムーズに流れていくのか、教師側の材料が抱負にないことには様々な視点を与えていくことができない。しかしながら、作曲の学びについて（音楽づくりについて）苦手意識のある教員も多くあり[3]今後の研鑽が大切だと感じる。

また、様々なジャンルの音楽がある現代において、子どもたちは普段どのような音楽を聴いているのか、子どもたちが良いと感じている音楽はどのようなものか前もってリサーチしておく必要があると感じた。それによってイメージしやすい音楽について考えが広がることに繋げたり、教師の問いかけの内容であったり、アドバイスなどに生かせるからである。

(2) 理論的な学習の必要性

今回授業をデザインするにあたって、「音」を中核に据え、音楽を形づくっている要素の中の「音」と「リズム」に焦点化した。生徒は、イメージを線画やイラストで表現し、そこから、音やリズムと結びつけていったのだが、創作活動に入る前段階として、音楽の基礎的な知識（ソルフェージュ）の学習が必要である。それは、音楽を感覚だけで捉えるのではなく、自分の考えを音楽で語るために、思いや意図をのせる意味づけとしても大切であると考えるからである。最終的には、五線紙に音を連ねて旋律として生み出し、音楽で考える力を身につけるための術でもある。理論的な学習は、小学校から中学校・高等学校まで、校種・学年段階的に積み重ね、「音」を「音楽」へと構成していけるものなので、創作の分野に限らず、どの分野においても必要な学びと捉える。小・中・高と理論的な学習の系統表などもあるとさらに深まった学習展開ができるのではないだろうか。

(3) 主題との関わり

音楽で考える力（思考力）は、「主体的な学び」→音楽を生活や社会に生かすこと、「対話的な学び」→音楽表現を聴いたり、演奏したりする過程と、「深い学び」→知覚・感受と捉え、実際の授業の場において、子どもたちが体感し、達成感を味わいという経験の中で、今回の「音」をつくるのは、聴いたり、音を探ったりする活動の中で、能動的に働きかけることができるのだが、その活動の中で、どのような場面で協働が見られたのか、研究主題・学習指導要領・授業構成の３つを一貫して考えていく必要がある。

子どもたちの感性によって感じられたものを、どのように音楽表現へと置き換えていくか、音楽作品として思いや意図をもったものにしていくためにこれからも考えていかなくてはならないものだと感じる。

結びに、いつの時代でも世界の共通語と言われている音楽は、人が感じたものを伝い合うことができ、心のつながりを表現し、さらに体感し、人と人との間の中でも個人でも感動を大きく味わえるものである。様々な音楽をどのようにとらえていくか、人生の多くの学びの中で音楽科としての役割をしっかりと考えていきたい。

〔引用文献〕
（１）文部科学省『中学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社、平成 20 年 9 月
（２）新学習指導要領「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ
（３）音楽教育ヴァン vol.36 p.21